

子規會誌

子規と結核

天岸太郎……………一

子規の漢詩(明治二十八年作)(二)

島川武夫……………七

子規・千亦・義郎

山上次郎……………二三

子規と芭蕉―近江紀行―(一)

村上春次……………二八

一四号

昭和五七年
七月

例会記録

三月例会（第四七〇回）

昭和五十七年三月十九日（金） 正宗寺庫裡
出席四十六名

浦屋薫幹事司会により開会、会長あいさつ。加藤拓川の祥月にあたり、三好幾次郎顧問の配慮により仮りにしつらえられた靈位に、田中宗垣副会長の統経により回向のあと、同顧問が「拓川居士の思い出」を語られ、展示された筆蹟を紹介、終わって、

講演「只管打坐の仏法より観たる子規居士の人生観」

会 員 松田 敏雄

なお、散会后役員会を開き、四月例会について決定。

四月例会（第四七一回）

昭和五十七年四月二十日（火）、子規記念博物館
出席八十名

浦屋薫幹事の司会により開会、会長あいさつ。のあと、総会行事として、菊池尹男幹事より事業ならびに会計報告が承認されたあと講演に入る。

「松山子規会の四十年」 会長 越智 二郎
「子規と碧梧桐」 副会長 和田 茂樹
なお、「子規会誌」一三号を配布した。

五月例会（第四七二回）

昭和五十七年五月十九日（水）正宗寺庫裡
出席三十七名

林関四郎幹事より越智二郎会長のご病状についてご報告あり、金村治三郎副会長の開会あいさつにつづき

講演「子規と芭蕉——近江紀行——」

幹 事 村上 春次

東予支部会（於西条市中央公民館）

昭和五十七年五月九日、西条市中央公民館と共催、参加五十二名、菊池尹男・村上春次両幹事出席、つぎの講演を行う。

「子規の辞世と死」

越智 通敏

「石樽千亦と義郎と子規」

山上 次郎

子規と結核

子規逝くや十七日の月明に

私は子規の死を思うとき、自然と胸に浮かぶのはこの虚子の句である。

子規の闘病生活を、弟子たちの中で最も身近に見てきた虚子は、子規の生命の灯が消え失せて、今までの筆舌に尽くし難いほどの苦痛から開放され、しかも、この地上に偉大なる文学的業績を遺して、静かに昇天する子規の聖なる姿を、皓々と照る月光の中に仏として仰ぎ見たのであろう。

私は、子規の生命を奪った結核が如何なるものであったかというのを考察することも、子規研究の一助となり得るものと信ずるのである。

子規の『啼血始末』によると、子規は、生まれつき体の弱い方であり、顔色も青く、早朝に起きるとよく胸がわるくて胃液を吐いたということであるから、幼児期の体格は外見的に良いものとは思われないが、この体型については、一般に信じられているほど結核の罹患には意味のないものである。しかも、子規は、少年期には順調な発育をとげたと思われる、明治十七年（

天 岸 太 郎

十八歳）大学予備門に入学したころの体格および体力は、学校の体格検査の結果ならびに友人等の言葉によると、ほぼ標準型であったと推察される。

結核の感染と発病とが、別々の意味をもつことは結核の特徴であるが、子規の場合において感染と発病の時期を考察すると、子規は幼年期から少年期にかけて、比較的順調に発育していることであるから、感染および発病は子規の松山在任時代ではなく、東京在任時代にあつたのではないかと推察される。

子規が明治十六年六月十四日（十七歳）入京の第一歩を新橋停車場に印してから、子規の東京での生活が始まったのであるが、『筆まかせ』の「下宿がへ」によると、明治十六年は日本橋区から赤坂に転じ、また日本橋に帰り神田に移った。翌十七年は牛込に転じ、再び神田に來たり、十八年には麴町区から神田に下宿、十九年は麻布から神田に行き、後に同区内の駿河台に転じ、二十年には一ツ橋中学寄宿舎に入り、二十一年向島須崎村に寓し、ついに本郷に移転し、次に下谷区にも住んでいる。まことにめまぐるしい転居の連続であり、子規自身も、野蠻人

の水草を追ふて転居するが如く、檐端に立て廻り燈籠を見るに似たり」と書いている。そして、同じ「筆まかせ」の「自炊」には、明治十六年の上京直後、浜町の久松邸中の長屋での生活について書いているが、「幾年掃除せずやと衛生係が苦情をいそいな」所で「牢屋へ行きしもこれほどにはあらし」と思われるような、不衛生で、不健康で、満足な食事もとらぬ生活を送ったようである。

結核の感染は、その大部分が氣道を介してのものであって、飛沫感染と塵埃感染とに大別されるが、後者の場合がはるかに多いのであって、子規の度重なる転居中に塵埃感染の機会があったものと思われる。

感染後発病するかしないかは、感染後一カ年が最も重要な時期であつて、この間に不衛生な生活、栄養障碍、過労で不規則な生活、精神的煩悶等が大いに關係し、初感染原発病果が治療の方向に進まず、病変が拡大するか、あるいはさらに新しい病巣を形成することとなつて、ここに発病という結果を招くことになるのである。

子規の上京後の数年間は、正にこの結核感染発病に最も適応せる生活ではなかつたかと思われる。

肺結核のごく初期においては、多くのものは特有の微候を示さないで、自覚症のないことが多い。強いて症状をあげるならば、痰と咳くらいであろう。

子規の場合においても、『啼血始末』によれば「此二年程は

酪変性といひ、その軟化した組織が氣管支を通過して外に排泄されたり、吸収されてできるものである。

空洞の大きさは大豆大から拳大等種々である。そして、空洞はあらゆる時期に発生し得るもので、結核の初期においても発生することもある。子規の場合も早期空洞と申すべきものであつて、この時期に結核に対する治療を真剣に考えたならば、空洞が小さい場合は比較的早く縮少し、症状の好轉をみたかも知れない。まことに残念なことであると思う。

第二回目の咯血は明治二十二年五月(二十三歳)であるが、咯血は一週間も続き、その分量は一度に五勺(九十cc)ぐらいであつたそうであるから比較的多い量と思われる、空洞の拡大を示すものと推察される。

子規はこの時は山崎元修医師の診察をうけたが、あまり真面目に養生したとは思われず、外出したり、夜おそくまで起きて俳句を五十句も詠んだりしたようである。この時に

卯の花をめがけてきたか時鳥

卯の花の散るまで鳴くか子規

の句があり、これより子規と号するようになったことはよく知られていることである。この年の夏は松山に帰省し、この時も長途の旅行で無理をしたためか、松山で咯血しこれが第三回目のものである。この時は元松山藩医の明星医師の治療をうけた。

明治二十五年九月(二十六歳)には、家族を東京に迎えるための準備で、肉体的には疲労し精神的にも苦勞が重なつたため

痰が出ることが常でありまして、病氣前は平生より少し繁く出たかと考えます。此外近年風邪を引く事の名人でありました」とあるので、この時期が発病期であつたと想像される。すなわち十七、八歳で感染し、十九、二十歳ごろ発病したのではないかと推察される。

また、『啼血始末』に、赤鬼に肺患の原因を問われ「自分は散歩や運動はきらひな癖にやるといふとベースボールの如き過激な運動をするのも却て身体を害したでせう」と答えているが、正にその通りであつて、子規は明治十九年にベースボールの試合をして捕手をつとめたそうであるが、子規はこの野球が大好きで「戦鬼になつてもやらうと思つて」いたくらいであつたので、相当の熱の入れようであつたと思われる。したがつて、静かに進展しつゝあつた結核は、子規の言葉のように、過激な運動によつて急激に拡がつて「躍進」(シュープ)となつたものと想像される。そして、明治二十一年(二十二歳)の第一回咯血へつながるのである。

この時の咯血は、明治二十一年の八月、学友と鎌倉に遊び、運悪く暴風雨に遭つて疲労したために一塊の鮮血を吐き、ややつてもう一度咯血したのであつたが、そのまま終わつたので医師の診察をうけることもなく放置したのであつた。

咯血は、大体において、肺の空洞の中の血管が破れて起るものである。空洞は、肺の病巣部が凝固壊死に陥つてそれが著明になると、肉眼的にはチーズに似た外觀を呈するが、それを乾に咯血し、これが第四回目の咯血であるが、この時は血痰程度であつたためか、医師の診察はうけていないようである。

明治二十六年二月には寒い日が続く、そのために感冒に罹り家の中に籠つていたが、二月十四日の朝咯血した。これが第五回目のもので、この時は宮本仲 医師に診察をうけ「この病氣は今にして根を絶たずんばゆゝしき大患となる故用心しなくてはならぬ」とこまごまと療養の注意をうけている。

しかし、ここでも子規は少し病状が良くなると安静にはしておれず、七月に入つて奥州に旅行し『はて知らずの記』を書いている。

明治二十八年(二十九歳)は、いよいよ病体子規に決定的打撃を与える日清戦争従軍ということが起こつた。

子規は生まれて最も嬉しきものの中にこの「初めて従軍と定まりし時」を入れていたが、頭腦明晰の子規ですら、明治維新以来滔々と流れる軍国主義の裏面の残酷さを見抜くことができなかつたようである。

同年五月帰国の船中で咯血し、神戸上陸と同時に神戸病院に入院したのであつたが、咯血が続き危篤状態となつた。ここでは江馬賤男院長、村井・泉両医員の治療をうけたのであるが、子規の左肺は非常に悪化しもはや用をなさぬほどであると指摘されている。

また、咯痰による結核菌の検査がガフキー氏法によつて行われたようである。結核菌は、咯痰から塗抹標本を作り、チール

・ネルセン氏法によって、菌は赤く他は青く染め分けられて顕微鏡下に数えられるのであるが、菌の数の多寡によって一から十まで分類されており、一が最も少く標本全面中1-4で、十は一視野中に無数に数えられるものであり、子規は当時ガフキ「七」であったが、これは一視野中にやや多数(13-14)の菌を見いだすものである。

菌が検出された場合は患者は開放性結核患者であり、ガフキ「七」氏法によって病勢や予後等を診ることができるのであるが、子規の場合はガフキ「七」であるので相当重症の開放性結核患者であり、したがって予後不良であると診断されたと思われる。

神戸病院入院中の大咯血によって、病巣は拡大し空洞は大きくなったものと思われ、肺以外の部位に血行性または淋巴行性に結核が轉移しつつあったものと推察される。しかしながら、一時は危篤となりながらも次第に落ちつき、表面的には快方に向かっているかの如く思われたので、七月に入って退院し須磨保養院で養生したが、その時、本邦最初のサナトリウム須磨浦療病院の鶴崎平三郎院長によって投薬をうけたこともあったようである。

その後八月二十五日故郷松山に帰省し、愚陀仏庵で漱石と共に約二ヶ月の生活をして、松山を発ち奈良を見物して東京に帰ったのは十月の末であったが、このあたりから骨結核が起りつつあったことは、大阪の宿から碧梧桐にあてた手紙の中に、

子規の晩年は左膝関節に結核が起り、左下肢は屈曲位に曲ったまま動かなくなりましたが、いつのころから結核が関節に及んだかは明らかではない。しかし、子規の最後の外出が明治三十三年六月三日の岡麓宅園遊歌会であったので、これ以後症状が悪化したものと推察される。また、脊椎カリエスでは膿瘍が脊椎管腔に入る時には、これによって脊髄圧迫症状をきたす。脊髄からは四肢の筋肉を支配する神経が分布しているのだから、子規の場合においては腰椎カリエスであるため下肢の運動知覚麻痺が起ったのであって、子規晩年の病牀六尺の状態はこのためである。

関節結核もまた血行性に感染をきたすものであり、関節を動かすことにより疼痛が増強するので、患者は動かすことを恐れて足を動かさないことが多く、そのために筋肉の萎縮を来たしついに動かなくなるという結果を招くものである。子規の骨関節結核以外の転移結核としては、腸結核と痔瘻がある。

痔瘻は明治二十九年四月二十八日、宮本医師の往診をうけた際、肛門の異常を感じていたので診察をうけたところ、結核性のものであると診断されている。

腸結核が起ったことは、『仰臥漫録』によると、下痢を続けた腹痛も訴えていることで明らかである。そして、その発現時は晩年になってからのことと思われるが、腸結核は大多数の場合結核菌を含有せる痰を嚥下するために発生するもので、

行く秋のふしぶしいたむ旅費哉

の句があることによっても推察することができる。

明治二十九年(三十歳)の三月、リウマチ専門医の診察の結果、左の腰の痛みはリウマチではなく、脊椎カリエスのためのものであると診断されたのであるが、ここに子規の結核は肺結核単独の時期から、肺外結核症の発生の時期が到来することになるのである。

脊椎カリエスは結核病巣より血行性に生ずるものであるが、子規の場合では、主治医である宮本医師の診断によれば、第五腰椎がカリエスの原発巣であったとのことである。脊椎カリエスは、感染部に結核性肉芽組織が形成され、漸次拡大して乾酪変性を起こし、結核性膿を生じてそこに膿瘍を形成する。膿は自己の重量によって抵抗の少ない組織内に移動し、原発巣より離れた部位に膿瘍を形成することが多いが、これを流注膿瘍といい、病勢によっては皮膚を自然に破って流出することもある。明治三十年二月、当時の外科の大家佐藤三吉博士に切開手術をうけたのは、腰部に現われた流注膿瘍であった。最下腰椎(第五腰椎)から出た膿瘍は腸骨筋膿瘍を作るが、これは子規の『仰臥漫録』に「腸骨ノ側ニ新ニ膿ノ口が出来テ其近辺ガ痛ム、コレガ寝返リヲ困難ニスル大原因ニナツテ居ル」とあるところから、やはり宮本医師の第五腰椎原発説は的確な診断であったと思われる。この腸骨の側にできた膿の出口は皮膚が自然に破れたものであろう。

下痢が持続することによって、全身の抵抗力は低下し死を早める結果となるものである。

その他に眼症状では明治二十九年に詠んだ『多病』なる漢詩に「眼前花乍現」(眼前に花たちまち現われ)とあり又『仰臥漫録』には「物ヲ見テ時々目がチカチカスルヤウニ痛ムノ八年来ノコトデアルガ先日逆上以來愈々ツヨクナツテ新聞ナドヲ見ルト直チニ痛ンデ来テ目ヲアケテ居ラヌヤウニナツタ」と書いており、しばしば黒眼鏡を用いているので、あるいは結核が眼にも及んでいたのかも知れぬ。

耳では同じく漢詩『多病』に「耳底虫頻啼」(耳底に虫頻りに啼く)と詠み耳鳴のあったことがわかるが、これは中耳結核等によるものではなく、血圧の低下および貧血によるものと思われる。

治療としては、現代のようにX線の無い時代であったので、後手に廻ることが多く、また、特効薬もないのであって、子規はしばしばクレオソートを服用しているが、これは、消毒作用を有し、醗酵を抑制して食欲を増進することに役立ち、結核菌の発育を阻害するとされていた。

あとは対症療法であり、鎮痛剤にはモルヒネを服用しているようである。この時代は結核の治療は栄養と安静であって、子規の場合食欲は旺盛であったので栄養は十分であったようであり、また晩年は足腰が立たぬがゆえにかえって安静を保つ結果となり、あるいはこれが逆に好結果をもたらしたと思われる

る。

栄養の点であるが、ただ単に食べればよいというものではなく、子規の場合、刺身とか栗とか柿とか、下痢の場合には幾分不都合なものもしばしば食べており、また、量としては食べ過ぎのようにも思われる。したがって、食生活にはもう一工夫あってもよかつたようにも思われるが、食べることを外に楽しみがない子規では、あの場合には仕方ないことであつたであらうし、また、子規が一般の結核患者のように食欲不振に陥らなかつたことは幸せであつたと考えた方がよいであらう。

看護のことについては、子規の母八重と妹律は実には献身的であつて、主治医の宮本医師は「御母堂特に御令妹は十分表彰されてよい方だと思ふ」と賞賛の言葉を贈っている。

主治医の宮本医師は、子規の二十歳前後から死に至る三十六歳まで、長年にわたり子規を診察し、代診の柳医師も宮本医師を助けて治療に専心したことは、子規にとっては幸せなことであつたと思ふのである。

晩年の子規は、全身の結核による強い疼痛に悩まされ、次第に心臓の衰弱をきたし、そのために循環障害を起して下肢の高度の浮腫を認めるようになり、ついには心臓の麻痺によって静かに昇天したのであるが、死の近づいたその瞬間まで文学活動を続け、偉大なる文学的業績を遺したことを考えると、単なる文学者だけにとどまらず、人間子規として、最高の尊敬を捧げるに値するものと思われ、私たちの心の中に子規の面影は

永遠に消えることはないのである。

(特別寄稿) (松山子規协会会员 医師)

投稿 歓迎

本誌は会員の皆様のご協力によって成り立っております。内容は、特別寄稿一篇と例会講演三篇を中心とするものでありますが、なお、場合によっては紙面に余裕を生じますので、左記により短篇をお寄せ下さるようお願いいたします。

- 一 子規ならびに子規をめぐる人々に関するものであること。
- 二 小論・随筆・紀行・詩・短歌・俳句等。
- 三 四〇〇字詰め原稿用紙十枚以内であれば枚数をとれません。
- 注意 短歌・俳句などの創作は必ず前記一に該当するものであること。

子規の漢詩——(明治二十八年作)——

島 川 武 夫

養病テコロリ 在郷里松山與夏目漱石同寓トクク

書劍風塵跡しよけんふうじん

蓴鱸鄉國心じゆんろくきやうこく

人煙遶城起じんえんじやうじやう

金氣從海侵きんきようみ

素月離山頂そげつ

秋風動竹林あきかぜ

不堪共分手たかね

夜靜露華深よせい

養病 病をやしなふ、長わずらひの療治をする、病氣の手当をする、養は治に同じ、養病、郷里 二十五家、五十里を郷といふ、轉じてむら、郷、郷里、郷邑、ふるさと、故郷、寓 かりやどり、やどる、さと、郷間、郷邑、ふるさと、故郷、寓 かりに住む、とまる、

風塵 物外に対して人の世をいふ、世の中、世俗、俗世界、に同じ。高適が人日寄社二拾遺詩「一臥東山三十春、豈知書劍老風塵」又、封丘作に「生可狂歌草澤中、書劍書物とつるぎ、古学者や、寧堪作吏風塵下」とあり、文人が常に携行したものと、晋の張翰が「二つの故郷の名産を秋風の起るに困って思ひ出し、これを味はんものと官を辞して帰郷した故郷、郷里に同じ、あり、よって故郷を思ふ情の喩に用ふ。」

蓴鱸 蓴鱸陰の暑、ぬなはのあつものと、すずきのなますと、晋の張翰がこの二つの故郷の名産を秋風の起るに困って思ひ出し、これを味はんものと官を辞して帰郷した故郷、郷里に同じ、あり、よって故郷を思ふ情の喩に用ふ。

人煙 人煙に同じ、人家から立ちのぼる炊煙、かま、遶 めぐる、又、どの煙、転じて人、又は人家をいふ、

金氣 秋の氣はひ、從 だんだんに經歷する意に用ふ、

素月 白い月の光、光の明らかな月、分 手をわかつ、人と別れ、皓月、皎月、白月、

分携 露華 露のひかり、露光、露の美を花に比していふ、

書劍を携へて郷里に帰り、病を養ひて風塵の跡を顧る。食物は郷國の心を起す蓴羹と鱸膾となり。人煙は城を中心として四方に生じ、秋の氣配は海よりして來たる。皎月は山の頂きを離れ、秋風は竹林を動かして吹く。共に手を分つに堪へずして夏目漱石と同く寓居す。今宵も亦靜かに更けて露華深かるべし。

この詩は、病を養ふために帰郷し夏目漱石の下宿に同寓せしを叙したるもの、五言律詩である。律詩は一韻八句をもつて構成し、三四の句および五六の句が対をなすを原則とする。韻は、五言の場合偶数の句に押し、七言の場合はその他に第一の句に押韻するを原則とするのである。

この場合人煙と金氣、遶城と從海、起と侵とがそれぞれ相對し、素月と秋風、離と動、山頂と竹林がそれぞれ相對して律を

なしている。この時一二の句と七八の句は自由である。詩式は五言絶句の詩式を二箇連ね用ふればよし。

従軍得病稍癒而歸京

従軍期死別 従軍 死別を期す

寧計得余生 寧そ余生を計り得んや

収涙児侍母 涙を収めて児は母に侍り

擎杯妹慶兄 杯を擎げて妹は兄を慶ぶ

夜山當隴黒 夜山 隴に當つて黒く

白菊映燈明 白菊 燈に映じて明なり

三逢就寥落 三逢 寥落に就き

猶能不世情 猶ほ能く世情ならずや

従軍 いくさに行

療病が出来る、癒に同じ。

死別 死にわか

計得 はかり得たり。

おもんばかり得たり。

撃 あく。

黒くろい、くろい、

就 つく、したがふ、なる。

家落 荒れはてて凄じい、さびしい、王建が古行宮詩に寥落古行宮、宮花寂寞紅、白頭宮女在、閑坐說玄宗(全唐詩一八〇七)。

世情 世態人情、世間の実情、俗世間の趣。

いくさに出でて死別を期したるに、計らずも余生を得たり。涙を収めて児として母に仕へん、妹は杯を擎げて兄の無事に帰京せるを慶ぶなり。

夜の山は窓に面して黒く、白菊の花は燈に映えて明るし。三逢

喬木凍禽聲・喬木 凍禽の聲

偶成 思ひがけなくできる、偶作、偶然に成る、又その作品。

寒扉 冬のと

天數 天の道、運命

自然の 閑しづか、

理法。 靜に同じ。

霧窓 はれた

残蝶 秋の木に残

凍禽 こごえた鳥、冬の鳥。

寒げな我が家の扉を訪ふ人無く、静かに臥し居れば曇りか晴かを識別するなり。人生れて已に運命定まりたれば、すべて自然の理法に任すべく、物と心一なるは心間にあればなり、晴れたる窓には秋杪の蝶影を留め、喬木の梢には凍へし鳥の聲あるなり。

この詩は例数少き三韻六句の律にして、三韻律または六句格と言はれるものなり。下平聲庚韻を用ひ、三四の句及び五六の句はそれぞれ対句をなす。律として最も短く、常形より逸脱した一変形である。

傲寒山體

路到寒山盡 路は寒山に到りて盡き

寒山古木多 寒山は古木多し

風高斷鷄唱 風高くして鷄唱断え

雲冷起樵歌 雲冷たくして樵歌を起す

去來本無意 去來するも本意無く

向上竟如何 上に向ふも竟に如何んぞ

又下寒山路 又下る寒山の路

將に荒れ果て、寂しからんとす、猶ほ能く是れ世情ならずや

この詩は、平起り偏格の五言律詩にして下平聲庚韻の詩なり。

律の場合には二句ずつを一組とし絶句の起承転結に充てる。この

二句を駢といひ起駢・領駢・頌駢・尾駢と呼ぶ。また、対句を

要求されている三四の句を前駢、五六の句を後駢と呼ぶことが

ある。また、律詩は創始の人の名をとり沈宋体(沈佺期和宋之

問)とも呼ばれる。

最後の二駢はこの詩の締めくくりにて、子規の人生観の一面

を見る。すなわち三逢寥落に就き風流文学將に荒れんとするも、

猶ほこれ世情ならずやと達観せることなり。

鄭常(中唐の人)が寄荆逸人詩に「羨君無外事、日與世

情違、地僻人難到、溪深鳥自飛。」(全唐詩一八五五)

とあり、また、元稹(唐の白楽天の友人)が寄秦天長詩の一

節に「榮辱升沈影與身、世情誰是舊雷陳。」(全唐詩二四三四)

とある、(この詩の雷陳は後漢の雷義と陳重のことで、友誼の

極めて厚い友人の代表に用ひられている)。世情の意はこのよ

うに用いられている。

病中偶成

寒扉人不到 寒扉 人到らず

静臥識陰晴 静臥して陰晴を識る

命定任天數 命定まりて天數に任せ

心閑與物平 心閑にして物と平なり

霧窓殘蝶影 霧窓 殘蝶の影

寒山古木多 寒山 古木多し

寒山 唐の憲宗時代(八〇六一八二〇)の人、天台始豐原の寒岳に住す。因清寺に往還し、童子に師事し、拾得と交はる。

禪皮を破り、布褌木屐して風狂に類す。後寒岳の穴中に去り、其の穴自ら合せりという。詩二百余首、寒山詩集あり。文珠、普賢菩薩の化身と言ふ高僧なり。其の詩集には豊干、拾得の詩一巻を附す。台州の刺史閻丘胤が寺僧道鏡をして蒐集せしもの、宋代これを三隱集といふ。詩は偈頌に類し、時俗を諷刺し、流俗を警醒す。宋の邵雍の擊壤集の一派はこの流を受けしものと云ふ。

寒山 さびしい、鷄唱 鷄のなき

樵歌 きこりのうた、木こりのうた。

寒山に到りて路盡きぬ。寒山は古木多し。風は高きを吹いて鷄聲聞こえず、雲已に冷たくして樵歌の聲起れり。去來するも本より意無し、上に向つて上るも竟に如何んかせん、又寒山の路を下る。猶ほ寒山 古木多し。

又

賃我半檐屋 我に半檐の屋を賃する

老婆貪而癡 老婆は貪りて癡なり

得錢無幾月 錢を得て幾日も無くして

督促度三時 督促すること三たびを度ふる時

我畏唯束手 我は畏りて唯手を束ぬのみ

婆嗔欲燭眉 婆は嗔りて眉を燭さんと欲す

問婆若微我 婆に問ふ若し我を微めなば

還怒向阿誰 怒を還して阿誰に向はんと

從軍航大聯灣船上口占

驃騎朝辞廣陵鎮 驃騎朝に辞す廣陵の鎮

鐵艦夕發字科濱 鐵艦夕に發す字科の濱

西連渤海天無際 西の方渤海に連りて天際なく

東顧扶桑月一輪 東の方扶桑を顧れば月一輪

鸚鵡遁逃旗上影 鸚鵡旗上の影に遁逃し

魚龍起舞鸞頭春 魚龍鸞頭春に起つて舞ふ

乾坤何物不來服 乾坤何物か來り服せざる

萬里西南意氣新 萬里 西南 意氣新なり

大聯灣 黃海北部で渤海湾に入らんとする辺り。驃騎將軍の名
遼東半島西南部に大連及び旅順あり。驃騎將軍の漢の
武帝霍去病を驃騎將軍と爲したるに始まる。 廣陵 地名、江蘇省江都県の
東北、又、廣島の唐名。

鐵艦 戰艦、鐵衛 字科 廣島の
字品港。 渤海 黃海の一部、遼東半島と
山東半島との間の内海。

扶桑 日本を指す、もと木の名、 鸚鵡 ものゝけ、山水木石の精
扶桑 四国の伊予にあつたといふ。 氣が凝つてなるすだま。

遁逃 にげのがれる、 魚龍 龍と
鸞頭 春 酒の名、鸞頭は
にける。 初めて熱した酒。

服がふ

驃騎將軍ともいふべき大島義昌少将は、今朝廣島を辞して朝

鮮に向ひ、軍艦は今宵字品を發せり。海は西の方渤海に連つて

広く、東の方故国を見れば一輪の月あり。鸚鵡鸞頭も軍旗の影

に逃げ去るべく、魚龍は鸞頭春に酔ふて起舞すべし。乾坤來り
服せざる何者もなく、萬里の波頭を超へ、西南日本の意氣新たに高し。

この詩は、日清戦争に従軍し字品を出發せる輸送船が大海を

子規・千亦・義郎

山上次郎

子規と石博千亦と森田義郎は、同郷同時代の歌人であるが、

三者三様三人の關係には微妙複雑なものがある。千亦の令息五島

茂氏は、千亦が子規の添削を受けたことがあるといっているが、

どうであろうか。私は会っていないような気がするが、令息で

歌人である氏の言ゆえ信じなければなるまい。しかし、このこ

とはもう少し調査考究してからにしたいと思う。義郎は千亦の

弟子であるが、子規のもとで活躍した。子規は、いうまでもな

く、万葉調と写生主義をもって明治の短歌革新をなしたけた人

で、根岸短歌会の元祖、近代短歌の源流と仰がれる。一方の千

亦は、子規が本格的に短歌に取り組む以前、すなわち、明治二

十六年に早くも竹柏園の佐々木信綱のもとに入門していた。信

綱は 学者弘綱の長男で、そのころ東京帝大の古典科を出てい

航海する状を詠じたもの、七言律詩上平聲真韻である。
七言の律の場合の押印は一、二、四、六、八の各句尾にする
が常であり、この詩も規をはずしてない。第一句の鎮は「まも
り」であつて成に等しい。仄起り五十六字、いかにも力の溢れ
た句であつて、意氣すでに遼東半島を呑むの概がある。
(昭和五十七年二月例会講演) (松山子規会会員)

名声が高いが、当時は信綱の方が何事にも優位にあり、子規は

信綱から田安宗武の「天降言」の原書などを借りて勉強したぐ

らいてあつた。しかし、信綱は歌人であるとともに學者であつ

たため、「心の花」の編集その外はほとんど千亦に任せきりの

状態であつた。つけ加えておくが、「心の花」の最初の発行人

は伊予三島市(旧豊岡村)出身の井原豊作(義矩)であつた。

他方、子規が「歌よみに与ふる書」を書いたのが明治三十

一年である。同じ新派でも、子規と信綱の考え方ゆき方には大

い違いがあつた。しかし、明治三十四年から数年間、「心の花」

には子規の旗本ともいえる伊藤左千夫・長塚節・香取秀真など

が盛んに自説を書き短歌作品を掲載して、「心の花」は信綱主

宰の竹柏園の機関誌でありながら、子規主宰根岸短歌会の機関

済会に就職させてもらっていて、仕事と歌の両面の恩人であった。ところが、義郎は松山中学時代から子規にあこがれて、「俳諧大要」や「歌よみに与ふる書」を筆写し、万葉調の歌を作りたいと考えていて、信綱の歌風に反撥するところがあった。義郎はこのことを千亦に訴えた。千亦は太っ腹な人間で、これはおもしろいと、万葉調を盛んに鼓吹していた子規を紹介した。気の早い義郎は直ちに子規をたずねた。明治三十三年七月二十六日のことである。

義郎は、初対面で子規の偉大な人間性と卓越斬新の歌論に魅了されて直ちに入門、のちには根岸短歌会に重きをなした。それでいて義郎は依然として千亦に兄事し、「心の花」にも属していた。とくに明治三十五年からはその編集発行人になり選者にもなっていた。もちろん千亦の推輓によった。義郎は、これを好機と、子規の文章をはじめ、子規門の歌論・随想・短歌会の互評の記録などを掲載。とくに子規が亡くなった時には、その十一月号を子規追悼号のようにする。すなわち、左千夫の「師を失ひたる吾々」、義郎の「追悼録」、安江秋水の「哀哭録」、蕨真の「雪国集」、さらに追悼の歌「へちまの水」、「根岸短歌会記事」その他を掲載、特別付録として十三度刷りの千規の写生画をつけ、さらに根岸短歌会の名で子規の百ヶ日追悼会の案内さえも掲載している。当時子規直系の「ホトトギス」が追悼集を出したのが十二月だから、「心の花」の迅速さには驚かされるものがあつた。いかに偉大人子規といっても、他の

庶務課長、のち常務理事になり、その生涯を水難救済一筋に捧げた。千亦の人間性が誠実で磊落淡泊、かつ人情に篤かったので、上司から絶大な信頼を受け、部下から慈父のように慕われ、文字通り救済会の柱石となった。昭和十四年には、五十年勤続の功勞によって伏見宮から御紋付銀花瓶をもらった。

千亦は、このような激務のかたわら短歌にも熱心で、「心の花」の編集発行人としての責任を遂行して、黄金時代を築く中心的な役割を果たしただけでなく、日本歌人協会の役員としても活躍した。主宰の信綱は、千亦が死んだ時痛惜、声涙下る追悼文を捧げたが、「心の花」の追悼号で

「君は操守極めて堅く、公職としては水難救済の尊き事業に五十有余年を献げ、天職としては歌道に一貫精進せられた」といい、次のように結んでいる。

「ますらを心の君、塵に染まざる歌を詠み出でし君、雄渾なる筆を揮ひし君、君今や亡し、風に臨んで君を思ふ事切なり、嗚呼悲しいかな」

「心の花」は短歌雑誌としては歴史が一番古く、今年一〇〇〇号に達して記念号を出した。茂吉や赤彦がいて、歌壇を制覇した観のある「アララギ」は九〇〇号であるから、百号古いわけである。それだけに育てた歌人も多く、川田順・木下利玄・前川佐美雄・齋藤劉・山下陸奥・九条武子・柳原白蓮・五島茂・五島美代子らがいる。

千亦の歌風は、「心の花」が信綱の指導精神「広く、深く、

結社がここまでのことをするのは全く異例で空前絶後といえる。このようなことを果敢に実行したのは義郎であるが、これをこのように義郎のなすに任せたのは千亦であった。こういうところが、子規と千亦と義郎の関係の縮図であろうか。

子規のことはこれ以上書く必要はなからう。千亦のことから書く。

千亦は本名横井五郎、明治二年西条市西原(新居郡橋村)の旧家横井長三郎の二男として生まれた。石榑姓は、明治二十八年岐阜の名家石榑利八の懇望によって養女しんと婚姻、養嗣子となったからである。千亦は号で、本名の辻五郎の辻が巷に通ずることから号したという。千亦の生家は四つ辻の一角にあつて、父はそれにちなんで名づけたのかも知れない。

千亦は幼少から穎悟で学業抜群、十四、五歳の時に出身の西泉簡易小学校で教鞭をとった。十七歳(明治十八年)の時、すすめる人があつて向学心押さえがたく、琴平の皇典学会附属の明道学校に入学した。この学校は、国文学専科で国学者堀秀成・水野秋彦らがいた上、短歌講座もあつたので、短歌に親しむ機会を得た。

明治二十二年卒業と同時に上京、琴平宮の官司琴陵宥常に見込まれて、水難救済会に就職する。救済会は四面海の日本の海難事故救済が目的で、宥常が私財を投じて創立、のちに国費の補助も受けて運営していた。総裁は伏見宮、会長は松平頼寿伯で、全国に百余の支部を持っていた。千亦は二十八歳で総務兼己がじしに「そのまま、大らかで、いや味がなく好感が持たれた。作歌力は旺盛で多作の方であった。歌集には「潮鳴」(大正四年)、「鷗」(大正十年)、「海」(昭和九年)がある外、改造社の「現代短歌全集」には「千亦集」があり、河出書房の「短歌大系」にも数多く掲載され、新万葉集には最高の五十首登載されている。作品は職業柄海に関するものが多く、「海の歌人」とも呼ばれているが、その外にも秀作絶唱が多い。若干首を紹介しておく。

大きくゆたに黒くうねれる波の果に光をさめて日のしづみ
ゆく

昆布のはの広葉にのりてゆらゆらにとゆれかくゆれゆるる
る 臨

波にもまれ昆布さわだてば乱れあひてあまたの鷗雨に立つ
見ゆ

今日もかも別るる鳥を懐しみしみ朝のしめり土ふむ
翼張りて鷗とびゆくをち方に又ははじめての鳥見出でつる

七人の子の行末をおもひつつ汝がその目とはにふたがれず
あらむ (妻の死)

今にしてつくづく思へばありし世は吾おろそかに思ひてあ
りけり (同)

子らをば草の上に臥させ八方にとどろき燃ゆる火中にたて
り (関東大震災)

大き都炎ともゆる火の上の濁れる空に月しらけたり (同)

萬のものみなひそまりて天地は一つの不二となりけるか
も

天つ日の影も及ばず大富士のみねのしら雪片あかりせり
輸血すとちたる眼ひらきみればいとしくゆるる風蘭の花

(遺詠)

二月をこやりつづけてふと見れば秋の雲白く空に光れり

(同)

千亦は子規とは三歳しか違わない。もちろん年下である。同じ愛媛出身ゆえ、お互いに親近感を持っていたはずである。かたや「心の花」の編集発行人、かたや俳句革新に引続いて短歌の革新の烽火をあげていた子規、当然関心を持っていたろう。

会ったことがあるかどうかの問題は別にして、千亦は子規を尊敬していたことは間違いない。令息五島茂氏によると、千亦の日本橋の家（関東大震災で焼失）の二階には、子規からもらった花卉の画が大切にかかっていたという（「短歌現代」五七年六月号、別に石川一成氏からの教示にもよる）。しかし、こういうことは子規の方の記録にはない。ただ、明治三十三年に、義郎を子規に紹介したことは間違いない。

義郎が子規をたずねるのは、義郎が千亦に万葉調の歌を作りたいといったのがきっかけであった。それを聞いた千亦は、何の躊躇もなく、それなら、子規は万葉調を力説鼓吹している、行くがよからうと、紹介の労をとったのである。しかし、この

は森田君は私を頼って上京したのであるが、私は森田君を自分の門人とせず、同郷の正岡子規の所へ紹介して勉強させたと言われたが、これは公平無私先生の態度をよく物語つてをり、私は感動して聞いたのであった。（「心の花」46―

12）

文明氏をして感動せしめた千亦の歌壇派閥や感情にとらわれない美しくおらかな人間性を実証した一文である。千亦は度量があり、太っ腹、いわゆる清濁あわせのむという大物であったようだ。それを物語る逸話は数多くあるが、中でも感激するのは、千亦が幾人かの歌人を水難救済会に採用して大切にしたいということである。たとえば、古泉千樞・飯田莫哀・柳田新太郎・高木一夫・新井洗・佐藤秀信ら数多くいるが、このうち、千樞は「アララギ」、莫哀は「霸王樹」、新太郎は「短評」という風に、「心の花」以外のものであった。しかるに千亦は彼らに全くわけへだてせず生活の面倒まで見た。中でも最もかわいがられ、また迷惑も受けたのは義郎であるが、千亦はそれらについて毫末もいやがったり、また、逆に自慢するようなことがなかった。この点実に立派であった。参考までに高木一夫の文を示そう。

「時に森田義郎氏がこの救済会の応接室に来た。来ると一週間や二週間は居たろうか。そこに寝ていて、食時にはどてらを着たまま小使室に小鍋を持ち出してお粥なぞ煮ていた。僕は口をきくのも気味が悪くて何も聞かずに終った。この森

時、千亦自身がなせ行かなかったのか。そこには、別に理由があったと考えられる。千亦は大正十二年に次のようにいっている。

「予は竹柏園の系統であるから（義郎に）佐々木信綱を紹介すべきであったが、思ふ仔細があって、根岸派の開山たる正岡子規氏に紹介した。既に万葉に私淑せりし義郎氏は忽ち根岸派に於て斬然頭角を現はし『短歌小梯』の著書を公にするに至った」（「実業の世界」）

文中重大なことは「思ふ仔細あって」というところである。「仔細」とは何を意味しているのだろうか。筆者の考えとしては、これは歌人の師弟関係のモラルだと思ふ。千亦は早くから信綱と師弟以上、「心の花」の編集発行人としての一心同体の関係である。子規をたずねて悪いわけではないが、その必要はなく、うるさい歌壇からどういふ眼で見られるかわからない、責任者としての自覚と自重のもと、自らは行かないで、義郎を行かしたと考えられる。そういう誠実さ一徹さが、信綱をして絶対的に信用せしめたのであろう。信綱が千亦を「君は操守極めて堅く」といったのはこういうことをさしていたのではあるまいか。

現歌壇の最高峰「アララギ」の土屋文明氏は千亦とは懇意な仲であった。文明は、義郎に関して聞いた話を次のように書いている。

「この森田義郎のことが話に出た時、先生（千亦のこと）

田氏がかうして時々ころがり込むのも石榑先生に甘えていたのであったらう」（「心の花」46―12）。

これは恐らくは大正の末期から昭和の初めにかけてのことであろう。そのころ義郎は、妻子から逃げられて天涯孤独の上臈を病んでいた。「心の花」からはすでに遠ざかっていたうえ、水難救済会をもやめていたのである。そういう義郎の面倒を見るのは、いかに同郷人とはいえ容易なことではない。

こういう千亦であったから万人から敬愛され、東京新聞や読売の歌壇の選者として人気もあり、晩年は歌人協会はいうまでもなく、日本文学報国会の評議員などをもしていた。それだけにその死は多くの人から惜しまれ悼まれた。

千亦の発病は昭和十七年の二月で胃がんであった。その後療養につとめていたが、六月四日の救済会の会員章親授式の時、五十年間一度も出席を欠かしたことの無い行事だけに、すすんで出席、伏見総裁官邸内の式場に待立、宮様退場のあと倒れたのであった。これと思うと、千亦は水難救済の仕事に殉じたといえる。八月二十二日逝去、七十四歳。青山齋場を告別式、のち麻布の筈町長谷寺（港区西麻布2-21-34永平寺東京別院）に埋葬された。法号は「日光院月清風居士」。

森田義郎についてはすでに断片的に書いた。はじめ千亦の世話になり、その紹介のもと子規門に入るが、千亦の謹厳実直、操守、潤達とは対照的で、熱狂的、猪突猛進型、変幻自在、不

罰放である。

義郎は明治十四年生まれだから、千亦よりは十二歳下である。周桑郡小松町の森田満蔵とフミの第五子として生まれ、幼少から神童とうたわれた。明治二十八年松山中学に入るが、そのころ英語教師として漱石がいた。しかも、義郎は、子規と漱石のいた愚陀仏庵の二軒隣に下宿していた。物に憶しない義郎も、その時はまだこの二人をたずねる勇氣がなかった。しかし、子規の「俳諧大要」や、三年のちの「歌よみに与ふる書」を愛読筆写していて、子規に憧憬の念を抱いていた。二十歳の時上京、小松出身の陸軍中将東宮侍従武官黒川通軌の書生になり、かたわら国学院と国語伝習所に学んでいたが、とくに短歌をも学びたく、同郷の先輩としての千亦をたずねる。義郎は次のようにいっている。

「三十三年予の郷学を辞して東都に来るや、未だ就いて学ぶべき人を見ず。石榑氏は同郷の先輩として又文壇知名の士也。行いて教を乞ふ。氏ゆるさず。而してここに水曜会生れたり。」(「心の花」811)

義郎はこの時二十歳、水曜会とは、救済会内での歌会である。明治三十三年の「心の花」には二人の歌が出ている。一頁ずつ紹介する。

誰つけて誰消しぬらむ只一つ燈台たてり荒波の中に 千亦
静かなる山の 一つ家まきを割る斧の響に桃の花散る 義郎
ともに当時としてはすぐれている。このようにして義郎はよき
み、反歌として
玉の緒をぬきかふべくは我命を君ととりかへぬかましもの
を

と、子規の身代りになりたいとさえ歌った。

このように一徹な義郎だけに短歌にも熱心で作品も優れ、歌論家としても秀でていた。こういうところを見込んだ千亦は、明治三十五年五月に、仕事が多忙なため、「心の花」の編集発行人を義郎に譲る。このことについて千亦は次のように書いている。

「義郎氏の歌を愛し、その研究的態度を賞し、文才を愛し性格を愛したる予は水難救済会の機関雑誌『海』の編輯をも委して、傍ら此処に氏が詠嘆を公表するの余白を与へた。次いで「心の花」の編輯をも氏の手に委ねた。」(『実業之世界』「森田君と和歌」)

若年(二十二歳)の義郎にあっては破格の知遇に浴したといふべきである。喜んだ義郎は、この時とばかりに子規門の作品と歌論、随想などを掲載した。当時の根岸短歌会は十名前後の小人数、全国的に有名で会員数百を有する「心の花」とは比べものにならない。しかし、俊秀ばかりだった。しかも、機関誌を持たぬまじしき、渡りに船と競って執筆した。こうして、「心の花」は竹柏園よりも根岸短歌会の機関誌、そして、信綱よりも子規の雑誌というようになる。「心の花」からいえば相を貸して母屋を取られた形である。義郎はこういっている。

先輩を得たわけである。ところが、義郎は信綱と「心の花」には批判的であった。義郎は「短歌雑誌」(大正十年六月)の中で、「佐々木さん(信綱)の弟子になるのは嫌だし」(「根岸短歌会時代」)と書き、さらに「とに角万葉集でいくのに限る」といっている。義郎はこのことを卒直に千亦に訴えたのである。普通であれば、生意気いうな、「心の花」の外は許さんというところであるが、千亦は子規を紹介したのである。このことが義郎の生涯を決する。義郎を迎えた子規は、同郷のよしみもあって、熱心に万葉集の優れているところを説いただけでなく、「心の花」にのっている信綱の歌をも遠慮なく具体的に批判する。感激した義郎は子規を生涯の師とするのである。

このようにして義郎は子規の根岸短歌会に入り、伊藤左千夫・長塚節・赤木格堂・蕨真らを知る。義郎は水を得た魚のように活躍する。そして、病の篤い子規のために看護番をつとめる。看護番というのは、俳人側から虚子・碧梧桐・鼠骨、歌人側からは左千夫・秀真に義郎の六人の順番制の看護である。この時の六人は、それぞれ子規を慰めるために、おもしろい話をしたり、珍しいことをして見せたりした。義郎はふるさとのためにも人形を作って見せたり、水難救済会がイギリスから輸入した夜光塗料を木の置物の猫に塗って鼠をおどろかしたりした。子規はことの外よろこんだ。このように義郎の子規への傾倒献身ぶりに涙ぐましいものがあった。義郎は子規の「林檎食ひて牡丹の前に死ななかな」の句を見た時、心のこもった長歌を試

「明治三十四年の暮から、石榑君が遣ってみて呉れと言ふので、『心の花』を僕が引き受ける事になった。以前から幹事になってゐたのだが、兎に角僕がやるやうになつてからは、自然佐々木さんから離れて、一年半ばかりの間は根岸短歌会が横領した形になつていった。」
千亦もこの通りのことをいっている。

「竹柏園の機関雑誌を根岸派に属する氏(義郎)の手に委して置くことの是非如何が八釜しくなつたが為めと、氏が国語問題に熱狂し、終に病に冒されたが為めに再び『心の花』を予が手に回収することにしたのである。」
これを見ると、「心の花」の同人間で相当問題にされ、千亦が苦しい立場に立たされたことは容易に想像できる。

このように、子規門の義郎によって、「心の花」の内部分裂もしくは千亦の責任問題が起りかねない危機に際し、子規は果たしてそういう事を知っていたかどうかということである。子規は病牀に釘づけのようになっていても大抵なことは知っていた。政治・経済・都市・農村の問題まで不思議なくらいよく知っていた。したがって、当然歌壇の出来事は知っていたし、このことについてもつぶさに知っていたらう。その証拠に次の文章がある。

「『こころの花』といふ雑誌は、広い東京にもただ一つしかない歌の雑誌であるが、その主意が曖昧であるとか、標準

が定まらないとか、いふやうな評が前からある。しかしよく考へて見ると、まだ歌の方は維新の界で衰へたまゝ、充分にその羽を伸ばして働くことが出来なかつた。そこで歌を作るものが少いわけてないけれど、旧弊な人が多いので、雑誌でも見やうといふやうな人は殆ど無い。そこで今日に於いて、銘々の歌の流儀を主張して、それぞれ別の雑誌を出して見た所で、それが皆成立してゆくわけにはゆくまいと思ふ。

そこでこの雑誌のやうな極めて複雑な雑誌が出来ていろいろな反対したものが一雑誌のうちに集つて居るといふやうなことも時勢上止むを得ぬことである。かういふ風によつてゆくうちには段々と歌の世の中も開けて来て黒は黒、白は白と、両方に立ち別れて、競争するやうなことになるであらう。

(明治三十五年七月、「心の花」5-17)

この文章はすべてを知り尽くした者でなければ書けないものである。まず「心の花」への批判を一般の評判のように書いているが、これが子規自身の考えでもある。「主意が曖昧」「標準が定まらぬ」「複雑な雑誌」ということは当時の「心の花」のいちばん痛むところである。それをうまく言つたあと、現状では新しい短歌雑誌を出しても成り立たないのだから、一つの雑誌にいろいろの人が書き、いろいろの歌が載るのもやむを得ないことだ、と「心の花」に同情して、最後に、このように呉越同舟でいつている間に、やがては、黒は黒、白は白と二つに分れて競争するようになるというのである。驚くことは、その

義郎は信綱にわびてようやく許されたというが、うなずくことが出来る。これが、ひいては明治三十七年「心の花」の編集発行人をやめる直接原因になつたとも考えられる。

いずれにしても、これらは激動の明治期の歌壇の一ページだが、その間にあっていちばん苦慮したのは千亦であつたことは誰にも想像できよう。師の信綱の方針、竹柏会の精神を守りながら、義郎をも傷つけないで守つてゆく大愛とも言える措置には頭の下がるものがある。

他方、根岸派から見れば義郎は子規の忠臣であり、その義郎のなすに任せた千亦は、機関誌を持たない子規一門から見れば有力な援軍でもあつたらう。いずれにしても、根岸派としては他の結社の雑誌を白領して自己の主義主張を遠慮なく言えたのだからもうけ物である。とくに、子規没後、「帝国文学」が子規の短歌の業績を全面的に否定した暴論を書いた際、子規門のさすの論客も、黙して一言の反駁をもし得なかつたとき、敢然としてこれに報いたのは義郎であり、その発表誌が「心の花」であつたことを思う時、この雑誌は思いがけない貴重な役割を果たす結果となるのである。

これを庇護し通したのが千亦であるが、千亦の真意が那邊にあつたかむつかしいところだが、少くとも公平無私の立場に立つ千亦の眼には、子規の偉大さと、根岸短歌会の面々の勉強ぶりと、義郎の歌論とは、他にまさるものを認めていたにちがいない。でなければ、義郎を編集発行人の地位からおろしたの

後根岸短歌会は「馬酔木」を出し、それが「アカネ」になり、さらに「アララギ」になつて、「心の花」をふくめた結社と長らく競争して今日に至つていて、子規の言の通りになるのである。しかも、驚くべきことは、こういうことを堂々と「心の花」に掲載したことである。この原稿は恐らくは義郎が依頼したものであるが、それを平然と掲載せしめた千亦も偉いというべきであらう。こういうことを見ると、千亦の考えには子規と相通するものがあつたように思える。

いずれにしても、義郎の破天荒ともいえる行動これが波瀾を呼んだわけである。普通であれば「心の花」破門ということだ。事実それと同じことがあつたようである。先般「心の花」の石川一成氏から「心の花の歩みと信綱」(「心の花」昭和三十九年四月佐々木信綱追悼号)の一文を示された。それによると、義郎の書いた「心の花」の文章が与謝野鉄幹・落合直文あたりにも影響して、信綱がきびしい抗議を受けるといふ事態になり、さらに、竹柏会と根岸派の対立を引き起こす。その根源は義郎の筆にあるわけで、信綱は当然義郎を「心の花」から追放することを考えたと思われる。石川氏の文章には、それを裏付ける義郎の信綱あての書簡も掲載されている。それには「石樽氏より委細拜誦。小子の筆によりて先生に禍を及ぼしたるは何とも申訳次第も無之候。(中略)如何様に仕り候てよろしかるべきや。御下合お待ち申候。」などあつて、さすが狷介不羈の義郎もよほどこたえたようである。石川氏の考えによると、この時

ちも、前と同様数多くの論説を書かせるはずがない。

たとえば、子規没後、根岸短歌会が機関誌「馬酔木」を出したとき、発行人の義郎と編集人の左千夫が衝突を重ねて、ついに義郎が除名されるという事態になつたときも、義郎のその間のいきさつを書いた「尋知諸兄に告ぐ」その他の文章の掲載を許した。無軌道とも言える行動と多くの歌人と衝突を重ねて孤立化してゆく義郎をあくまで庇護し、生活の面倒まで見た千亦は稀に見る君子人のように思える。

義郎は三度結婚した。一番はじめの妻は沼津の国弊小社浅間神社の官司神尾長鏡の娘とし子で、その世話をしたのが千亦であつた。しかし、とし子は長男舟一を生んですぐ別れる。その間、政治運動に狂奔、大正三年の日比谷焼打事件では二十一日間拘留される。その後二回の結婚もうまくゆかぬ、義郎は狂気のように放浪し、酒と女で失敗を重ねる。西条中学時代同級であつた河上哲太は、代議士を長らくつとめた高深な政治家であつたが、義郎に深く同情し、「森田は女あるごとくに狂ひ、或ひは狂するごとに女の話あり」と慨歎しつつも、何とか歌集でも出してやりたいと言つた。また、歌壇の大御所齋藤茂吉からも認められた。

このように義郎は心ある人に憐れまれつつ、後には岩田愛之助の愛国社に身をよせ、最後には加命堂病院の一室で、昭和十六年一月八日、だれ一人にもみとられることなく孤独の死をうけてしまふ。生きて悲壯、死もまたあまりに悲劇的であつた。

それでも、政界・歌界の巨星が集まり、葬儀は盛大であった。委員長は河上哲太、千亦ももちろん万般の世話をした。戒名は「誠徳院義幹万葉居士」、墓は豊島区雑司ヶ谷の本浄寺にある。

考えてみるのに、千亦と義郎は性格行動すべてが反対で対照的であった。しかし、共通するものが三つあった。一つは、短歌を人一倍愛したこと、二つめは共に酒を愛したこと、三つめは共に書がうまかったこと。

千亦は斗酒なお辞せずでしかも崩れることがなく、人は「酒仙」とも「ビル持の尊」とも呼んだ。昭和十七年発病入院する時、医師からとくに酒一合を許されたほどであった。一方の義郎は酒狂と言われ、子規から酒を慎しめと忠告されたことは有名なである。酒豪としての共通性が、共通した酒の秀作を残している。

久かたの神代このかた強ひられてうれしきものは酒にしあ
るらし 千亦

いひもえぬこの酔ひごころ山はさけ海はあせぬともかゝは
りもあらず (同)

男はも酒をのむものぞ男はも万斛の酒に酔はざるものぞ
大かたはおぼろになりてわが眼には白き盃一つのかれる (同)

酔うてくれねばもの足らなく思ふ酔ふてやらねばもの足ら
ず (同)

たたなはる山ことごとく黒すめり、ひとり白きは石錐山か
も (同)

母のため釣瓶の水をたぐりつる深井の水に顔を洗ふも
池の如き海のこなたの尾の道も知らずて母は逝きましにけ
り (同)

古さとの八はたの杜の木の芽だち軸先にひかり近々と見ゆ
父もふみ母もふみけむ土の香のその香にしあれや懐しその
土 (同)

父にむかふ厳しきとして船の上ゆいしつち山の朝姿みる
たらちねの母が乳のうまし国我故郷の伊予はよろしも
義郎

玉津より桑村かけてうちかすむ此の平にて我は生まれき
父も母も在さぬ国に帰りきて石錐の山をなつかしと見る
同

なく思ふわが故郷なり (同)

太刀偏益良健男の言あげてのむべきものは酒にしあるらし
義郎

八千歌はならずもあれど一杯の酒はさきずにありがてなく
に (同)

八入折の樽八つすゑて八百日ばかりしめらしめらにのまば
死ぬとも (同)

かくて我死にきと聞かば酒故となべての人は聞き流さまし
最後に書の手だが、千亦は歌壇を代表する書の一人といえる。
融通無碍、天衣無縫の筆致には達人の趣がある。とくに酒に酔
った時のものに傑作が多い。

義郎の書は岡山高蔭に学んだだけあって本格的、香取秀真は
現年有数の書家と言っている。ところで、不思議なのは、義郎
には酔って書いたと思える作品を見ない。どういうわけだろう
か。

もうひとつ共通していることを加えるならば、二人とも石錐
山麓に生まれたので、石錐山を中心とした故郷を詠んだものに
秀作が多いということである。

心あてにそれかと思ればそれと見えて月にかすかなり故郷
の山 千亦

東するわがこの船を遠く見て家なる母の胸さわぐらむ
同

伏待の月のぼるらしそそり立つ石錐山は片光りして
同

石錐の冠の滝のおちたぎりおとのとどろと山鳴りとよむ
同

石錐の山の峽を立出るくもは我家の方に向へり
心なしと誰かいふべきさきがにの雲はさながら我に言問ふ
同

今年、生年から数えて子規は一一五年、千亦は一一三年、義
郎は一〇一年めである。天界の三人は、今ごろ手をとりあって
談笑していることであろう。

(本稿は、一九八二年五月九日、松山子規会主催の西条中央
公民館での講演草稿である。のち、「心の花」の石川一成氏
の教示により改訂附加するところがあった。しるして感謝す
る。)

(松山子規会会員)

子規・千亦・義郎略年譜

山上次郎稿

(一九八二・五・九)

慶応三年 (一八六七)	一歳 子規松山市新玉町に生まる。本名常規幼名升。父隼太、母八重。	石樽千亦	森田義郎
明治二年 (一八六九)	三歳 自家が焼失した。	一歳 愛媛県新居郡橋村(現西条市)西原横井良三郎の次男として生まる。本名 辻五郎。	
明治一四年 (一八八二)	一五歳 詩友と岩屋寺に遊ぶ。		一歳 周桑郡小松町に森田富三の第五子として生まる。戸籍上は義良。
明治一八年 (一八八五)	一九歳 大学予備門の学年試験に落第する。松山に帰省。井手真棟に短歌を学ぶ。	一七歳 琴平皇典学会附属明道学校に入学、国文学専攻、課目中短歌講座あり、作歌にしたりむ。	
明治二二年 (一八八九)	二三歳 咯血、子規と号す。	二二歳 上京、帝国水難救済会に就職。	
明治二五年 (一八九二)	二六歳 大学を退学、「日本」新聞社に入社。	二四歳 子規をたずねて添削を受けたとすればこのころか？	
明治二六年 (一八九三)	二七歳 「瀨祭書屋俳話」上梓、「芭蕉雑談」を書く。	二五歳 竹柏園主佐々木信綱に師事。	
明治二八年 (一八九五)	二九歳 日清戦争従軍から咯血して帰り、松山中学英語教師夏目漱石の愚陀仏庵に入る。「俳諧大要」	二七歳 岐阜の名家石樽利八養女しんと婚姻、養嗣子となる。	一五歳 松山中学に入学、漱石がいた愚陀仏庵の近所に下宿、子規の「俳諧大要」を筆写した。

明治二九年 (一九〇〇)	三〇歳 腰脊骨随炎のため歩行不能になる。	二八歳 水難救済会総務兼庶務課長になる。	一六歳 松山中学の分校が西条に出来て西条に移る。
明治三〇年 (一九〇七)	三一歳 柳原極堂、松山から「ホトトギス」を発売。子規は「俳人蕪村」などを書いた。	二九歳 歌文同攻会を井原義矩(豊作、伊予三島市豊岡の人)と興す。	一七歳 松山中学に復帰した。
明治三二年 (一九〇九)	三三歳 「歌よみに与ふる書」を執筆、短歌革新に着手。「ホトトギス」東京に移る。	三〇歳 「心の花」創刊、編集人となり、巻頭に「発行の詞」を書いた。この年二七首発表。	一八歳 「歌よみに与ふる書」を愛読筆写した。万葉集を筆写した。「心の花」に歌を投じた。
明治三三年 (一九一〇)	三四歳 根岸短歌会興る。伊藤左千夫・岡麓・香取秀真ら参加。	三二歳 「心の花」の発行人をも兼ねた。一七八首発表。「心の花」、岡麓・香取秀真らの「詞林」と合併。	一九歳 校長排斥運動に關連松山中学退学、代用教員となる。七月「心の花」に入会。
明治三四年 (一九一〇)	三五歳 万葉輪読会を開催、根岸短歌会を熱心に開く。日本週報に歌を募る。写生文に熱を入れる。義郎の来訪を受ける。	三三歳 三男茂(五島茂)生まる。来訪の森田義郎のめんどうを見る。水難会にて義郎を指導するとともに万葉調を好む義郎に子規のことを教えて訪問の機会を与えた。	二〇歳 上京、陸軍中将黒川通軌の書生となる。国学院と国語伝習所に学ぶ。さらに帝国水難救済会に就職。七月二六日子規をたずね、根岸短歌会に入り、左千夫・秀真らを知る。
明治三五年 (一九一〇)	三六歳 「心の花」に「病牀歌話」をのせる。葉物帖などに水彩画を描く。酒癖の悪い義郎に忠告をした。九月十九日没、三十六歳。	三三歳 「心の花」に子規の「病牀歌話」をのせた。養父利八没。随想「初湯」、「陸奥日記の中」小説「桐一葉」を掲載。	二二歳 「心の花」に歌論をのせるとともに子規の根岸短歌会にも熱心に出席した。黒川中将邸を出て下宿した。
		三四歳 五月水難救済会の業務多忙のため「心の花」編集兼発行人を森田義郎に際す。「心の花」は子規逝去に際し、「心の花」は「竹の里人正岡先生逝く」の追悼文その外をのせるとともに、特別附録として子規の十三度刷	二三歳 一月六日日本歌学会の幹事となる。五月「心の花」の編集発行人となる。病篤き子規の看護番となる。八月子規に郷里の田面人形を作って慰めた。子規逝去に際し涙ぐましい世話

明治三六年 (一九〇三)	子規庵で一周忌追悼句会。		りの写生画をつけた。 「はり扇」外数篇の小説を書いた。	
明治三七年 (一九〇四)	一年くりあげて子規三周年忌を修す。松山の正宗寺に埋髪塔建つ。		三五歳 四男史郎生まる。多忙にて作歌少し。随想と小説「たからふね」、「夜汽車」、「ホルモサ物語」など六篇を発表した。	
大正二年 (一九一三)		四三歳 義弟八木善文遺稿集を自筆石版刷にて刊行。	二四歳 「心の花」編集人をやめる。 「日本」新聞社入社。千亦の媒酌で沼津浅間神社の官司の娘神尾とし子と結婚した。	
大正四年 (一九一五)		四七歳 第一歌集「潮鳴」刊行。	三三歳 政治運動に挺身、日比谷焼打に参加、二日間拘留される。	
大正八 年 (一九一九)		五一歳 水難救済会二十年勤続表彰を受ける。結婚二十五年を併せて「心の花」千亦祝賀記念号出る。	三五歳 五百木飄亭らの「日本及日本人」に参加。シーメンス事件、国民義会などで遊説した。 この前後時事歌を多く作る。	
大正一〇年 (一九一九)		五三歳 第二歌集「鷗」刊行。	四一歳 皇太子妃(現皇后)の色盲問題にて活躍。	
大正一二 年 (一九一九)	大正一三年からアルスの「子規全集」刊行。	五五歳 妻しん三月八日死去。 五月水難救済会常務理事になる。 大震災で家屋焼失。	四三歳 千葉の蕨檀堂に「竹の里歌」の草稿を金五〇〇円にて譲る。	
昭和二年 (一九一七)	母八重没、大龍寺と分骨を正宗寺の正岡家累代の墓に納める。	五九歳 阪倉吉蔵長女千代を娶る。	四七歳 兄義男死去、帰郷した。	

昭和五年 (一九二〇)	次の年から改造社の子規全集出る。	六二歳 改造社短歌全集に「石樽千亦集」入る。 第三歌集「海」刊行。	五〇歳 寒川風骨・香取秀真らと歌誌「阿迦雲」を発刊。
昭和一四年 (一九二九)		七二歳 救済会勤続五十年の功勞により、伏見宮より御紋付銀花瓶下賜さる。	五九歳 愛国社岩田愛之助のところにいた。
昭和一五年 (一九三〇)		七二歳 森田義郎の葬儀の世話をする。 「心の花」五〇〇号、「牧水の歌」を書いた。	六〇歳 一月八日、加命堂病院で逝去。 六〇歳。 葬儀委員長 河上哲太、千亦も世話をした。
昭和一七年 (一九三二)	前年妹律没、大龍寺に葬る。	七四歳 胃ガンで東大物療内科入院、日野寿一らの治療を受く。 八月二三日逝去、七四歳。	

子規と芭蕉 — 近江紀行 — (一)

村上春次

はじめに

子規と芭蕉、この道の二大偉人に、こわいもの知らずにとり組もうとしたが、あまりにも命題が大きすぎてとりつくしまもない。そこで、問題をしばって二人のかかり合い、出会いを二つにわけてみた。すなわち、一つはその旅であり、二つは俳句の道である。ところが、その旅といっても、近江紀行（明治二三、九）、信州紀行（二四、六）、奥羽紀行（二六、六）等があるが、ここでは近江紀行の中で二人の出会いを探究することにした。

百聞は一見にしかず、昨五十六年十月下旬、近江路を訪れ、幻住庵・義仲寺・井筒屋等をたずねたので、ここに、そのあらましを記述してみたが、どうか読者のみなさんも、今をさる九〇年前の子規と、三〇〇年前の芭蕉と、ともに旅をしたつもりで読んでいただきたい。

さて、芭蕉は、近江の数々の歌枕に強く心を惹かれ、また、琵琶湖の自然美をこよなく愛し、数回にわたって近江路を訪れた。

四方より花吹き入れてにほの波

芭蕉

行春を近江の人とおしみける

芭蕉

そして、遺言により遺骸は愛する湖南の地、義仲寺に葬られた。現にこの寺の中に次の句碑がある。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

芭蕉

次に子規は、明治二十三年八月二十六日〜九月六日の間、芭蕉の跡をたつてこの地を訪れた。漱石あての書簡に、「小生飄然と琵琶湖畔に天下り、石山寺に参籠し、幻住庵の跡に錫をとどめ……」と書いている。

なき人のたましいうけん芭蕉庵

子規

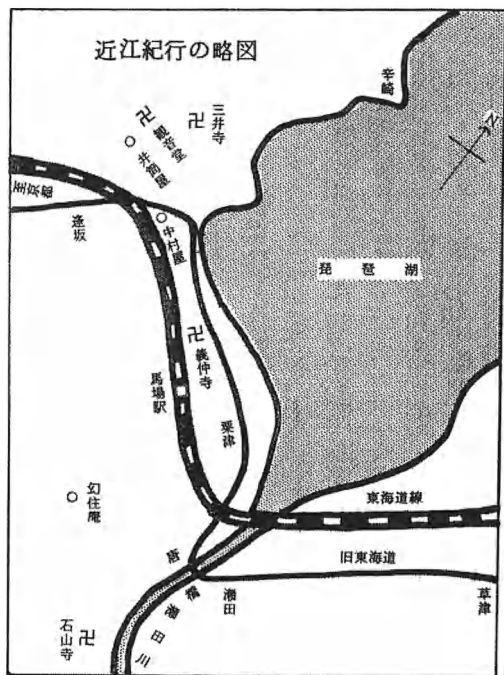
さらにつづけて、「小生居を三井寺（筆者註以下同井筒屋）に卜す、山光水色脚下にむらがり、八景皆頭に浮ぶ……」

浮世より外のうき世や水と月

子規

近江紀行

まず、子規の「しゃくられの記」を中心として、芭蕉の「野ざらし紀行」「幻住庵記」等を参照しながら、その出会いを追求してみたい。



名月や児たち並び堂の縁

芭蕉

名月や座に美しき顔もなし

芭蕉

子規は、ここで義仲と芭蕉の墓とが背中合わせ（現在は並立）であるのに哀れを感じ、「行灯のひとり消えけりけさの秋」の句の乙也（近江人、米商人富岡氏、明治五年没）とはいかなる人が疑問をもった。

白露のこぼれたあとや塚一つ

子規

さびしさのうれしもうなる芭蕉かな

子規

瀬田の唐橋

芭蕉は、元禄元年（一六八八）、この地に旅し、湖南の風光を愛でて次の句を詠んだ。

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋

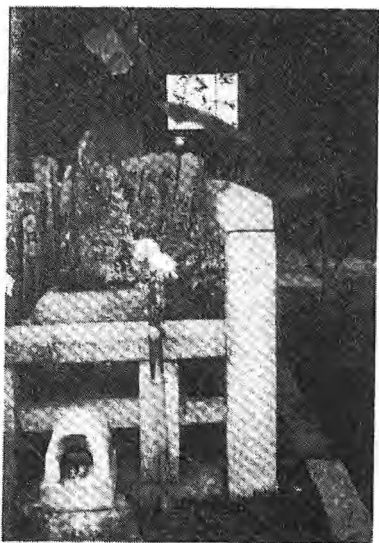
芭蕉

子規は、義仲寺を出、栗津（晴嵐）を経て、兼平の塚を横に

さて、子規は明治二十三年八月二十六日、近江の月（八月三十一日土曜、満月）を観るため郷里松山を出発、翌二十七日、大阪を経て同日大津（馬場駅）につき、旧ステーション（浜大津）前の中村屋（中村家？）に宿泊した。

義仲寺

芭蕉は、貞亨二年（一六八五）から元禄七年（一六九四）の間、九年間に一〇回余にわたり、義仲寺無名庵を訪れ、または滞在している。いかに湖南の風光を愛したかを証するものである。そのときの句、



芭蕉塚

見ながら唐橋(長橋)につき、三上山(むかで山、都の富士)を正面に見ながら歌った。

長橋で都の富士を見てあれば

むかでのように汽車の行く也

子規

石山寺

芭蕉は、元禄三年(一六九〇)四月、勢田に泊り、源氏の間を見て紫式部をしるび、

曙はまだむらさきにはときぎす

芭蕉

また、元禄四年八月、石山の秋の月を觀賞して、

名月は二つあつても瀬田の月

芭蕉

子規は、唐橋から瀬田川に沿って石山寺に行く。寺は壮大にして奥ゆかしく、月見堂、源氏の間、等、むかしなつかしく感じた。

幻住庵

芭蕉が、幻住庵に移ったのは、元禄三年四月六日であった。

ここは膳所から四、五里の国分山に建てた。そこから瀬田川・唐橋・三上山・比良山・膳所城が手にとるようによく見え、湖水と周辺の山々の眺望もよく、人里をはなれた山腹は、奥の細道の長途の旅の疲れをいやすには好適の土地であった。入庵早々の四月十日付け書簡に、「幻住庵と申す破茅、あまり静かに風景面白く候故、暫く残生を養ひ候」といつている。

芭蕉はこの滞在を機会に「幻住庵記」という長文の俳文を作った。これこそ芭蕉俳文中最も精神を傾注した作品である。



あった。

住んでみると、初夏の幻住庵の住み心地はよく、「美景物として足らずと云事なし」という眺望なので、初めは「やがて出でじとさへし思った。庵の名のようにはいずれこの世は幻の住家である。つらつらわが身の過去をふり返ってみると、いろいろと曲折があつたけれど、無能無才で、この風雅の道一筋に生きてきた。

此の道や行く人なしに秋の暮

芭蕉

西行の和歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、

その貫通する物は一つである。

この一筋の道こそ、芭蕉の生き抜いていく強い道であった。

このように絶望的になりながらも、積極的に希望を表白したのが次の句である。

先たのむ椎の木もあり夏木立

芭蕉

子規は、明治二十三年八月二十八日、石山から横に曲って十町ばかり行き国分村につく、ここは道路が細くなり人力車が通らないので、独り歩いて山を登った。登りつめた処に八幡社があった。その横に草の茂った(現在は平地で草なし)三坪余りの土地があった。これが芭蕉の住んでいた幻住庵の跡であった。そこには、「先たのむ……」の句碑があった。(写真の右の石)

この句碑は、天保一四年国分村泉福寺住職太田恵性和尚の建立したもので、碑文は桜井梅室(大原其茂の師)筆である。その横に芭蕉釋塚の自然石があった。また、近くに芭蕉が自炊したときの清水があった。

まぼろしのいづこに住んで草の露

子規

よほどこの幻住庵が気に入ったとみえて、子規は再度この地を訪れている。

琵琶湖観月

芭蕉は元禄四年(一六九二)八月仲秋三夜(待宵・望月・十

この庵は、弟子の菅沼曲水が、伯父幻住老人の別荘を修繕して芭蕉に提供したものである。居間は四畳半、そこに木曾松笠、越の菅蓑がかかっている。そのほかに仏間一畳、その後ろが食器、臥具などを収める棚、押入れが

六夜)の観月の興宴を催した。これこそ、芭蕉の生涯における最高にして最良の三夜であったのではなからうか。まさに、風流の匠巻ともいうべきであろう。

文者の「月見の賦」によると、「ことし琵琶湖の月見むと、膳所、松本の弟子ども相集り、乙州は酒をたづさえ、正秀は茶をつゝみ、酒堂は茶に玉川が歌を詠じ、丈草は酒に楽天が詩を吟す、……」とあり、そのときの句、

米くるゝ友をこよひの月の客

芭蕉

「かくて三盃の興に乗じて湖水の月に船を浮べ、目はよし蓬菜の水をへだてず、身はたゞ芙蓉の露にうるほふ。夜はや、五更(午前四時)に過ぎぬべし」。

三井寺の門たゝかばやけふの月

芭蕉

十六夜は、湖上に舟を走らせて堅田の竹内成秀亭に遊んだ。

鎖明けて月さし入れよ浮御堂

芭蕉

子規は、八月二十九日(三十一日、満月)夕、小舟を雇って辛崎に向かう。月赤くさし出でて、空に雲なく、湖は鏡のように、山々はただおぼろに烟るが如くであった。そのときの句、

名月や湖水の中に舟一つ

子規

月一つ湖水に塵もなかりけり

同

月一つ瀬田から膳所へ流れけり

同

さらに、辛崎から舟に乗れば、舟人はともずなを解いて、また湖水に漕ぎ出で、月はいよいよ上り、雲はいよいよ低く飛んでいった。その時の漢詩、

琶湖擁筆遊江塵、山紫水明憶美人
一夜天風吹我去、白雲皎月遇詩神。

このように、子規は、琵琶湖の自然美にふれ、無我の詩境に入り、詩神（芭蕉の詩魂）に遇ったのではなからうか。これこそ、子規と芭蕉の出会いのハイライトというべきであろう。

辛 崎

辛崎は唐崎ともいう。古代より琵琶湖は朝鮮・中国（唐）への航路となっていた。辛崎の松は、今日の燈台のように、目標となっていたためであろうか。

ともあれ、この松は舒明帝六年（六三三）初めて植えられたと伝えられ、はつきりしているところで現在の松は三代目、大きさは東西七二m、南北八六m、幹の太さ九m、高さ一〇m、初代は天正九年（一五八一）植えられ、二代は天正一九年、大正一〇年枯倒、三代は大樹の実生、現在に至る。

さざなみの志賀の唐崎さきくあれど

大宮人の船まぢかねつ

柿本人麿

唐崎の松は扇の要にて

漕きゆく舟は墨絵なりけり

紀貫之

さて、芭蕉は貞享二年（一六八五）三月、「野ざらし紀行」の途、近江に滞在、辛崎に遊び、湖水を眺望し、「予が方寸の上に分別なし……たゞ眼前なるは……」と語っているように、芭蕉はも早や技巧を払い捨てて、自然美に直入する境地に到達していたのである。

辛崎の松は花より臙にて

芭蕉

次に子規は、明治二十三年八月二十九日夜、小舟一艘をかりて辛崎へ向かう。途中、小きき魚が、月に狂ったのか、舟の中へはね上がってきた。ようやく辛崎につき、上陸すると、名高い松は四方に広がって、一枝の長さ一四、五間（二七m）もあり、その枝四方に這いわたり、頭をこするばかりに低い。

あの枝に見しこの枝に松の月

子規

子規会誌 十四号

季刊（四、七、一〇、一月）

発行日 昭和五十七年七月十九日

発行 松山子規会

松山市末広町正宗寺内

郵便振替徳島一八六八

印刷所 青柳堂

松山市東長戸二丁目一三九

お買物の楽しさを贈る

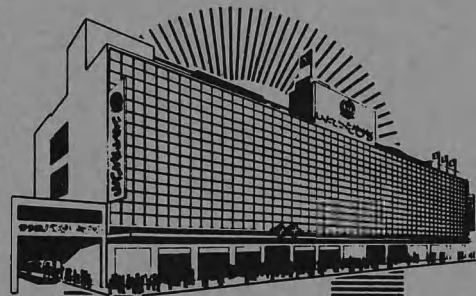
いよてつそごうの商品券

いよてつそごうの分店・出張所そごう各店共通でご利用いただけます



いよてつ
そごう

松山・市駅



《松山》

大洲出張所
中村254

今治出張所
旭町1丁目
(今治国際ホテル1階)

八幡浜分店
矢野町7丁目

東予出張所
三津屋南7-31
(一色第2ビル1階)

宇和島分店
御幸町2丁目

新居浜出張所
一宮町2丁目

サンパール出張所
御荘町平城

伊予三島出張所
中央1丁目

宿毛出張所
高知県宿毛市新土居2605

500円からご希望の金額をセッいたします
(ご用命は) 1階商品券売場・分店・出張所で承っております

北海道から九州まで全国に広がる

そごうグループ

札幌 ● 東京 ● 千葉 ● 柏 ● 船橋 ● 木更津 ● 大阪 ● 神戸 ● 広島 ● 松山 ● 黒崎

古本の店
坊っちゃん書房
古書誠実買入れ

松山市銀天街中央 TEL 0899-31-3426

四国道後温泉

政府登録国際観光旅館



宝荘ホテル

〒790 松山市道後鷺谷町2-20

TEL (0899) 31-7111(代)

加藤 拓川 畠中 淳編著

松山子規会叢書第13集 312P 2,300円

松山文学案内 鶴村松一著

校区別文学案内, 一般向き 200P 1,200円

松山市小栗6丁目3-23 青葉図書 ☎(0899)43-1165

¥ 300